アメリカの黒人イスラム教団

ネイション・オブ・イスラムについて

松岡　泰

一　サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』によせて

最初に、ハンチントンの『文明の衝突』は戦争で有名になりましたが、内容はご承知のように、東西の冷戦構造が崩壊して文明国どうしの対立、特にアメリカと中国あるいはアメリカと日本、とりわけアメリカとイスラム諸国との対立、それを軸にして国際政治が動くようになった、特にイスラム対欧米諸国の対立を軸に国際政治が動くようになったということが書いてある本で、原理分析としてはそれなりにおもしろいところがあると思います。植民地問題などいろいろな問題に触れていませんけれども、ただ、アメリカ側からみてイスラム圏の脅威というものを肌で感じてこういう本ができたのだと思います。国際政治の面でイスラム諸国の脅威をアメリカが感じたということはありますけれども、それと同時にアメリカ国内でもムスリム、イスラム教徒が増大しておりまして、アメリカが外におけるムスリム国家との対立、それから内におけるイスラム教徒の増大という両面から圧迫されていました。

アメリカにおけるムスリムということですが、一九

九五年十月十六日に Million Man March（百万人大行進）が行なわれ、約七十五万人から百万人がワシントンに集まったといわれています。

これまで有名なワシントンでの大行進というのは、マーチン・ルーサー・キングが一九六三年に行なった大行進で、二十五万人ぐらいの規模です。それに比べると三倍から四倍の規模なのですが、日本ではほとんど報道されませんでした。誰が主催者なのかもほとんど知られておりませんし、主催者の顔もわかりません。アメリカにいてもなかなか主催者の顔というのは写りません。規模は大きいのですが、ほとんど紹介されないのが現実です。というのは、この百万人大行進というのは、正確にいうと黒人男性だけで百万人集めるというもので、黒人女性も白人も入っていませんで、そういう意味で白人のメディアもカバーしにくかったようです。

百万人集まるというのはすさまじい話で、この主催者が後でお話ししますルイス・ファラカンです。彼の動員能力は凄まじいものです。日本ではジェシー・ジャクソンが有名ですが、彼がスピーチをやっても数十人から数百人集めるのがやっとで、二百人から三百人集まればよいといわれています。それに対してこのファラカンという人物は、大体平均して五千人から二万人を常時集めることができる人物だといわれております。しかし黒人だけを対象にするためほとんど白人メディアは入っていきませんので、アメリカでもほとんど顔が知られておりませんし、日本ではましてや知られておりません。これだけの動員能力をもっているのは彼だけです。これほどアメリカでは黒人の間では名前の売れた人物ですが、日本ではファラカンのことを知っている人はほとんどおりませんし顔をみた人もいないと思います。黒人の間で異常な人気があると同時に白人から憎まれている人物ですので、メディアで紹介されるときもracist Farrakhan と呼ばれ、非常に評判の悪い人物です。

外におけるイスラム国家の欧米への反発、それからアメリカ国内でのムスリムの増大があり、それを背景にしてハンチントンの『文明の衝突』は書かれたので

はないかと思われます。

アメリカのムスリムの現状については、正確にはわかりません。というのは、センサス（国勢調査）には宗教を書く欄がありませんので、何人がムスリムかというのはわからないからです。しかし、一九九三年の推定では、アメリカには五百万人から八百万人ムスリムがいるのではないかと思われます。そのうちの四〇％近くが黒人です。あとはインド、パキスタン、バングラデシュで二四％から二五％、アラブ系が一二％、アフリカ（北アフリカが主体）が五・二％、イラン三・六％、トルコ二・四％です。

この推計は移民局の統計を基礎にして、たとえばパキスタンなら人口の九〇％がムスリムで、そこからやってきた移民の何十％がムスリムだろうというようなかたちで類推していくもので、当たっているかどうかわかりません。世界の中で中東のムスリム人口が占める比率はわずかに二〇％で、ムスリムの大半は今やアジア、要するにパキスタンとかインドネシア中心になっています。

最近ではこのようにアメリカのムスリムの中に占める移民の比率が高くなってきましたが、これもこの二十年ぐらいの現象で、一九七〇年ぐらいまではムスリムのほとんどは黒人でした。アメリカの場合は九〇％といってよいほどムスリム＝黒人でした。そして黒人のムスリムの組織が、ネイション・オブ・イスラムというものです。アメリカの黒人ムスリムのほとんどが、ネイション・オブ・イスラムを経由してムスリムになったのだといわれております。

二　ネイション・オブ・イスラムの概略

簡単にネイション・オブ・イスラムをご紹介しますと、一九三〇年に発足しましたのでもう七十年以上の歴史があります。その創立者というか教組はウォレス・ファードという人物です。

アメリカでムスリム、イスラム教の宣教活動をすると嫌がられて、コミュニティーでも嫌がらせを受け警察からも嫌がらせを受け、また組織を作っても内部の権力闘争で暴力沙汰になったりしますので、頻繁に名

前を変えながら転々とするのが普通でした。ファードの場合も五十八の名前を使っていたといわれています。ネイション・オブ・イスラムというのはブラック・ナショナリズムを掲げる宗教団体で、会員は黒人だけです。しかし、ファードは白人です。教組は白人で、最新の研究ではもともとはパキスタン系ではないかといわれています。いずれにしろ、黒人ではありません。一九二〇年から三〇年頃アメリカ人の移民観を調べる調査がありました。どこの国の国民がいちばん嫌いかというアンケート調査です。いちばん評判が悪いのはトルコです。統計によると、黒人よりひどいし、日本人よりひどいのです。当時の中国人というのは非常に評判が悪いのですけれども、それ以下です。なぜかというと、トルコ＝オスマントルコでイスラム教徒という固定観念が強く、黒人以下あるいは中国人以下、日本人以下という感じです。ですからイスラム教徒がアメリカに移民でやってきても、できるだけイスラム的なものを隠そうとします。名前の使い方も多分にそうかと思います。

いずれにしろ、ファードという人物が教祖になって黒人の間で宣教活動をします。なぜファードという白人系の人が黒人の間で宣教活動するかというと、アメリカではムスリムというのは非常に軽蔑されますし、中東系でしかもイスラム教徒であると白人社会で受け入れられなくて、黒人社会にしか入っていけなかったようです。しかしファードが黒人社会の中でこういう運動を始めますと、三年ぐらいで会員が八千人ぐらいに急速に膨れ上がります。デトロイトを中心に活動するのですが、一九三三年に警察に捕まりまして追放され、三四年には行方不明になります。それ以降はわかりません。その後を継いだのがイライジャ・ムハマドという、これがネイション・オブ・イスラムの最も中心的な人物です。彼が一九三四年から七五年まで教組的な存在です。彼の時代に、マルコム・Xやモハメド・アリがイライジャ・ムハマドから洗礼名をもらってスポークスマンになって活躍します。イライジャ・ムハマドは百二十七の名前を行く先々で使って活動しています。

一九七五年に亡くなると、その息子のウォリス・デイーン・モハメドがネイション・オブ・イスラムを継承して今に至っているのですが、息子のモハメドは継承すると同時にこれまでのネイション・オブ・イスラムをほとんど解体してしまいます。もともとネイション・オブ・イスラムというのは白人憎悪を唱える集団です。会員も黒人だけ、非常に厳格で一日一食、そしてギャンブル、酒、不倫などすべて禁止でかなり厳しい掟を課す団体です。その上、とにかく白人に対する嫌悪感が非常に強く、白人とは別の国を作ろうという〝Separate State〟というのを標榜する団体です。ところが、息子のモハメドが継承すると、その方針を半年か一年ぐらいで全部撤廃して正統派のスンニ派に改宗します。白人差別なども撤廃しますので白人も会員になれるし、祈りの仕方もアラビア語を導入してお祈りしたり、今まで閉鎖的だったのを全部オープンにしてしまいます。ネイション・オブ・イスラムというのは中央集権的な色彩が強く中央からの指令で人事その他が動いていたのですが、全部権限を地方に委譲してしまいます。いろいろな都市にモスクがあるのですが、そのモスクの権利書などもそれぞれのミニスターに分け与えて全部財産を分与します。そういうふうにして、ネイション・オブ・イスラムがある意味では解体します。名前も the World Community of Al-Islam in the West、それから一九八〇年には the American Muslim Mission、更に Muslim American Society へと変わります。現在はこちらの派の勢力がはるかに強く、一つの組織にまとまってはいませんが、この派に属する多くの組織の信徒を総合すると、最低百万おそらく三百万人以上いるのではないかといわれています。アメリカの黒人ムスリムのほとんどは、現在はこちらのほうです。ですから、ネイション・オブ・イスラムに入っていた人たちがだんだんやめて、正統派というかスンニ派の、中東などで信奉されているほうに改宗してしまいます。

昔ながらのネイション・オブ・イスラムが解体されたと申し上げましたが、しかしそれに反発したルイス・ファラカンという人が、一九七八年に伝統的なネイション・オブ・イスラムを再建します。それが現在

も存在しているネイション・オブ・イスラムです。先ほど申しました動員力の高い人物というのは、このルイス・ファラカンのほうです。彼のほうは信徒数は非常に少なく、一万人から二万人ではないかといわれています。こちらは、伝統的なネイション・オブ・イスラムの立場をとり、白人を蔑視するとか Black is best などしょっちゅう唱えて黒人至上主義を採用しています。実際の信徒数は少ないですけれども、世論に受けるのはこちらのほうです。

これから申しあげますのは、全部ネイション・オブ・イスラムの特徴です。一般的には非常に保守的な集団だといわれております。なぜかといいますと、アメリカではリベラルな人達はホモやレズビアンの権利など認めますが、ルイス・ファラカンはそういうものに絶対反対ですし、家庭というものを強調し、勤勉に働けと力説します。とにかく民主党が主張するようなリベラルな政策を真っ向から批判するのがファラカンです。ただ、発想の仕方は革命的というのかよくわかりませんけれども、黒人のもっている伝統を根こそぎ否定するような発想をとります。どういうものかといいますと、アメリカではかつては黒人といえばアル中や麻薬中毒が連想されたようですが、この団体は酒、麻薬、ギャンブルを一切禁止します。それからアメリカ的な名前を黒人がもっていますと、それを奴隷の名前だということで全部拒否して名前を変えさせます。その結果、いちばん多いのがXです。マルコム・XのXは、自分の祖先が誰だかわからないということでXを使っており、自分たちのアイデンティティはどこにあるかわからないということです。この団体は奴隷制時代から黒人が培ってきた伝統というものを全面的に否定しますので、黒人の伝統的な食生活も拒否します。黒人の食物というのはソール・フードといわれて、南部で発達した臓物なども使う食事なのですが、そういうものも一切拒否して基本的には菜食主義です。アメリカの一般のブラック・ナショナリストの場合ですと、黒人のもっている伝統を奴隷制時代であろうが何であれ賛美する傾向が強いのですが、このネイション・オブ・イスラムというのは、アメリカにきて黒人はずっ

と奴隷だったということで、奴隷制下で培われた黒人の伝統というものを真っ向から否定して、全部放り投げるようなところがあります。こういうのがネイション・オブ・イスラムです。

三　アメリカにおける「文明の衝突」

ネイション・オブ・イスラムというのは、一九三〇年に発足して今まで残っている集団で歴史は古いのですが、おそらくアメリカで最も異端視された集団で、共産党以上に監視され続けた集団ではないかと思われます。初期の頃はカルト集団と位置付けられ、マークされます。この組織はデトロイトが発祥の地ですが、「白人を殺したら天国にいける」という噂が広がって、実際人を殺して祭壇に捧げるという事件がいくつかあって、それで市警察からずっとマークされ、そのおかげで資料がたくさん残っているのです。一九三〇年から四二年というのは、「カルト集団」として位置付けられ、特に黒人から嫌がられます。黒人街に黒人のイスラム教徒が住んでいて、彼らは子供を公立学校に行かせずに自分たちの University of Islam という学校に行かせますので、近所の子供とも一切付き合わせませんし、まったく近所付き合いもしないのです。集まっていつも集会をやって、一日一食主義ですし、傍からみると非常に奇妙な集団で、それで殺人事件や内部抗争などおきて警察からマークされるだけではなくて、近所の黒人が非常に嫌がって取り締まるように警察に訴えるわけです。ですから、この黒人イスラム教団にとって警察以上にやっかいだったのは、むしろ黒人社会です。創設者のファードが死ぬと、その後継者争いでかなり権力闘争のようになり、後を継いだイライジャ・ムハマドは名前を変えて十年ぐらい全米を渡り歩いて転々とします。とにかく、この当時イスラム教というのは非常にイメージが悪いです。

一九四二年から四五年の期間になりますと、アメリカの黒人イスラム教徒はＦＢＩから「敵国日本への協力者」とみなされます。ＦＢＩの資料の中に Moorish Science Temple of America に関するものがありますが、この組織はアメリカでできた黒人の最初のイスラム教

団で、教組はすぐに亡くなるのですが、その組織自体は細々とではありますが生き残ります。それに対してＦＢＩがずっと調査するわけです。なぜＦＢＩがこの組織を調査したかといいますと、第二次大戦中にこの Moorish Science Temple of America が日本と協力してアメリカ国内で破壊活動をやるのではないかと疑ったからです。今から考えると荒唐無稽な話に聞こえますが、アメリカの黒人の間に日本へのシンパシーが生まれて、彼らが日本と協力してアメリカで内乱を起こそうとしている、とＦＢＩは考えたわけです。ですから、ＦＢＩはこの小さな団体だけで三千百十七頁の記録を作成しているのです。ネイション・オブ・イスラムも同様に、第二次大戦中は日本への協力者という形で捜査されます。

イスラム教徒のネイション・オブ・イスラムの人たちは第二次大戦中は徴兵拒否しましたが、彼らはそれだけでアメリカ政府から異端視されます。それだけではなく、ＦＢＩは彼らが敵国日本と協力してアメリカ国内で反乱を起こそうとしていると考えるわけです。

サトハタ・タカハシという日本人は、ＦＢＩの資料によりますと、黒人ムスリムの間に潜入してオルグし、アメリカの中で反乱を起こそうとしていた人物ということになります。そういう理由から、ＦＢＩはこのタカハシをずっとマークします。彼がネイション・オブ・イスラムに接触して、ネイション・オブ・イスラムの教えはどんなものか、メンバーは何人かなどいろいろなことを聞き出しにイライジャ・ムハマドの所にくるわけです。要するにこの関係で、ネイション・オブ・イスラムはマークされるのです。

ネイション・オブ・イスラムは、徴兵拒否をしたということだけで愛国心に欠ける危険な団体とみなされましたが、それに加えて彼らは反白人の意識が強いので、その意識が日本へのシンパシーへと移っていったわけですから、ＦＢＩがマークしたのも当然といえば当然です。ですから、たとえばマルコム・Ｘが逮捕されたとき、「自分は第二次大戦中、日本軍に登録したかった」ということをいうわけです。そのくらい、第二次大戦中は黒人の間では日本への期待感というのは強

かったのです。これは日露戦争の影響です。要するに植民地にならなかった国で唯一白人をやっつけた国が日本でしたから、アジアやトルコで日本人に対するひいきが生まれたといわれていますが、それと同じ感情がアメリカの黒人ムスリムの間にも生まれていたわけです。日本がアメリカにやってきて白人をやっつけてくれる、そして黒人は解放されるという期待がずっとあって、戦前は黒人の間で流布していたといわれています。これには私も驚いた次第です。

一九四五年を過ぎると、ネイション・オブ・イスラムは愛国心に欠ける組織、要するに「非米的」ということでマッカーシズムの対象になりマークされ続けます。普通はマッカーシズムというと白人だけが問題にされますが、黒人のネイション・オブ・イスラムも一貫してマッカーシズムの対象でした。公民権運動が吹き荒れる一九五〇年代末から一九七〇年代までは、「破壊活動を企てる集団」という容疑でFBIからマークされます。

一九七〇年代になりますと、ネイション・オブ・イスラムを監視する集団に、ユダヤ系団体も加わってきます。特に一九三〇年代に生まれたあるユダヤ系の団体は、スパイを使って内部情報を引き出して新聞に掲載するという方法をとりますが、一九七〇年代からターゲットをネイション・オブ・イスラムに絞ります。これは中東情勢の反映です。一九七〇年前後といいますと、中東でイスラエルとパレスチナの対立が問題になっている頃です。アメリカ在住のユダヤ系団体は全面的にイスラエルを支持する関係上、アラブ系あるいはイスラムを支援するネイション・オブ・イスラムがユダヤ系の団体のターゲットになります。具体的には買収などして内部事情を引き出し、それを新聞にスッパ抜くなどというようなことをしています。特に一九八〇年代から九〇年代にかけては、ユダヤ系がアメリカのイスラム関係の報道をコントロールしたといわれています。アメリカでも伝統的に差別されてきたユダヤ系は、以前はアメリカでそれほどユダヤ色をだしませんでしたが、一九七〇年代からユダヤ色を強くだすようになったといわれています。佐藤唯行氏によりま

すと、アメリカのメディア関係、『ニューヨーク・タイムズ』紙や『ワシントン・ポスト』紙などの三大高級紙、『タイム』、『ニューズ・ウィーク』などの三大高級誌、三大テレビ系列で働く全従業員の二七%がユダヤ系です。一九八三年の調査結果によりますと、テレビ業界幹部の五九%がユダヤ系です。講読者も『ニューヨーク・タイムズ』紙の場合は三分の一以上はユダヤ系といわれております。ですから、これらのメディアは特に反イスラエル・反ユダヤ関連の発言や政治運動には極めて敏感に反応します。その際いちばん槍玉にあげられるのがネイション・オブ・イスラムで、『ニューヨーク・タイムズ』紙などに掲載されたネイション・オブ・イスラムのイメージが他の新聞にも伝播していき、悪玉に仕上げられていくわけです。

四　ネイションと国際社会

このようにネイション・オブ・イスラムというのはブラック・ナショナリズムを掲げる小さな秘密結社的なグループで、外部の人間には全然わからないようなグループです。ところが、こんな小さな秘密結社的なグループなのですけれども、国際社会の変化の影響をまともに受け急速に変質していきます。

ひとつは一九六五年の移民法の影響です。一九六五年の移民法が改正されるまでは、アジアからの移民というのはアメリカにはほとんど入ってこられませんでした。アメリカはこの種の移民をほとんど禁止していたわけです。要するに、アラブ系が入ってきませんし、ちゃんとしたイスラムの知識をもった人が入ってきませんでした。ですから、ネイション・オブ・イスラムはかなり独特の教義をもち、信徒は黒人だけに限定し、白人は悪魔と唱えても誰も不思議に思いませんでしたし、それはそれで通用したわけです。しかし一九六五年に移民法が改正されて世界中からいろいろな人がやってきだし、特にムスリムが大量に入ってきますと、ネイション・オブ・イスラムの教義はきちっとした知識をもつ移民のムスリムからすると「あんなのはムスリムではない」といわれるようになるわけです。

どのくらい入ってきたかといいますと、最初にいい

ましたように、以前はアメリカのムスリムのほとんどが黒人でしたが、今では三〇%から四〇%に過ぎません。ムスリム移民は一九六五年に移民法が改正されたあたりから急速に増えていきます。具体的には、イラン系ですと一九八〇年から増えてきますが、一九七九年にイラン革命が勃発したため、大量にイラン人の亡命者あるいは難民がアメリカに入ってきたわけです。それからアフガニスタンからの移民の増加は、明らかに一九七九年のソ連のアフガン侵攻と関連しております。パキスタンの場合は、おそらく印・パ戦争とバングラデシュの独立が大きく影響しているのだと思います。ほとんどの移民は自発的、積極的にアメリカにやってくるというよりも、国内で政変が生じてそれで押し出されてやってくるわけです。

その結果、アメリカにおけるムスリムの人種別、民族的構成の比率が急速に変化してきます。以前は黒人がアメリカのムスリムのほとんどを占めていたのですが、移民が大量に入ってくることによってシェアが少なくなり、黒人はムスリムの中でもマイノリティに転落していきます。移民法が改正されてわずか十五年後の一九八〇年の推定では、黒人が三〇%、中東、北アフリカ出身が二八%、バルカン出身が二六%、アジアが一一%となっています。

大量にムスリムが外国から入ってきますと教義論争がおき、ブラック・ナショナリズムを唱えるネイション・オブ・イスラムの教義の正統性が疑問視されるようになり、従来のものではやれなくなっていく。ニューヨークの場合もバルカンから大量に移民が入って、黒人は非常に少ない。ムスリムの中で黒人がいちばん多いのは唯一イリノイのシカゴです。ネイション・オブ・イスラムの本部があるのがこのシカゴです。ですから中東出身者あるいはバングラデシュ、インドネシア出身の人がモスクを建ててお祈りをするようになると、その人たちがネイション・オブ・イスラムの教義はまちがっている、正統ではないと唱えはじめ、それがネイション・オブ・イスラムが変わらざるをえない理由のひとつです。

もうひとつは、アラブ・イスラム諸国からネイション

への寄付の問題です。一九七〇年頃まではアラブ諸国から寄付というのはありません。ところが、一九七〇年か七一年に最初に寄付したのはリビアのカダフィです。彼がたしか四百万ドルを寄付してモスクを建てます。それをきっかけにして、アラブ諸国がネイション・オブ・イスラムに寄付をしてモスクがどんどんできる。そうなると、ネイション・オブ・イスラムのアラブ諸国への経済的依存というのはどんどん高まってきて、それ抜きでは維持できなくなる。そうすると、また教義の問題もどうしてもでてこざるをえない。

次に、アラブ諸国がネイションに寄付を始める時期に注目して下さい。アメリカは中東戦争に際してイスラエルに経済援助をしますが、その額が飛躍的にのびてくるのがこの頃です。アメリカの対イスラエルへの援助額はそれまでは六千六百万ドルぐらいですが、ジョンソンの時にそれが三億ドルになる。これがニクソンの時には一九七二年に六億ドルになる。ですから、たった数年で六千六百万ドルから六億ドル、十倍になる。アメリカが全面的にイスラエルをバックアップします。ちょうどその時、アラブ諸国がアメリカ国内のネイション・オブ・イスラムにどんどん寄付を始めるわけです。この頃は中東戦争の真っ最中です。ですから中東諸国は中東諸国で、長期的にアメリカの中にイスラムの信徒を増やしていく戦略をもっていたのでしょう。

五　ネイション・オブ・イスラムの方向転換

いずれにしろ、こういう形で移民のムスリムが大量に入ってくると、教義論争をせざるをえない、どちらが本家かという争いをせざるをえない。それから経済的にもアラブ諸国に依存する体質がでてきて抜き差しならなくなっていくわけです。結果的にはネイション・オブ・イスラムというのは、スンニ派のほうに吸収されます。二〇〇〇年に世界中からミニスターを呼んで一緒に演説したりお祈りをし、公式に教義を修正します。このような軌道修正の動きはこの時初めてできたかというと、そうではなく、古くは最晩年のマル

コム・Xなどもネイション・オブ・イスラムを脱会して正統派・スンニ派に変わっています。そして変わったときに暗殺されます。その後ネイション・オブ・イスラムを継いだウォリス・ディーン・モハメドも正統派に移ります。ただし、伝統的なネイション・オブ・イスラムを慕う人たちをルイス・ファラカンが集めて古いネイション・オブ・イスラムを維持するのですが、その古い体質をもったネイション・オブ・イスラムですら、もはやもちこたえられなくなってスンニ派に変わっていくわけです。

なぜ変わるかというと、ひとつは教義争いです。国際的にも国内的にもイスラム団体として認知される必要性は非常に強いかと思われます。もうひとつは、ネイション・オブ・イスラムというのは分離国家というのを標榜してきました。なぜかと申しますと、ネイション・オブ・イスラムが発展した時期というのは一九三〇年から六〇年で、これはアメリカ社会で黒人が白人社会から完全に分離されていた時代です。ですからネイション・オブ・イスラムの発想のスタイルはそういう時代にピッタリ適合していたわけです。ところが、一九六五年に公民権法が制定されて黒人への差別が禁止され、黒人が白人社会にどんどん入っていきミドルクラス化していきます。今は黒人がいろいろな所に入って、黒人の三分の一はミドルクラス化したといわれています。ですから、白人悪魔説を唱えられる地盤がなくなってくるわけです。とりわけネイション・オブ・イスラムの信徒はすぐにミドルクラス化するのです。なぜかというと、彼らは一日一食で、非常に勤勉に働くからです。最底辺で入ってきたのがあっという間にミドルクラスになるので、この組織から抜けていきます。それで経済的に維持できなくなる。維持できなくなったところを外国からの援助で賄う。そうするとそちらに依存せざるをえなくなる。そういう構造です。

第三の理由は、ネイション・オブ・イスラムの組織はイライジャ・ムハマドの晩年の時には大分膨らんで二十万人くらいの規模になっている。そうすると運営資金も莫大になってきます。信者の学歴はもともとあ

まり高くなく、ギャング・メンバーだった人も多いわけですので、組織を運営するノウ・ハウをもっている人間がいなくて維持できないわけです。ですから、組織の外部からそういう人をリクルートせざるをえない。その種の知識やノウハウをもった人は信徒にはいないので、ネイション・オブ・イスラムの会員でない人たちを大量に雇ってこざるをえなくなる。したがってネイション・オブ・イスラムが発行している『モハメド・スピークス』という新聞は、途中から編集者は会員ではなくなってしまいます。そういう形でどんどん変質していきます。

最後に、組織の規律が非常に厳しいので、普通の人はなかなかこれに耐えられない。一日一食ですし、男女席を同じくせず、酒も飲まずギャンブルもせず、たいへん厳しい世界ですからなかなか耐えられないので、やはり信徒数が全然増えないのです。こういういろいろな背景があって、ネイション・オブ・イスラムは結局は、ウォリス・ディーン・モハメドの正統派のほうに吸収合併されてしまったようなかたちです。

六　おわりに

ただ、吸収合併されたらそれで済むかというと、やはり問題が残ります。もともとネイション・オブ・イスラムというのは都市のスラム街をベースにしています。たとえばマルコム・Xは、犯罪を犯して刑務所に入っていてそこでネイション・オブ・イスラムの信徒になるのですけれども、信者を獲得する場所のかなりの部分は刑務所か軍隊といわれています。ところがネイション・オブ・イスラムが完全に正統派のイスラムに変わっていきますと、刑務所に入っている絶望と憎しみに打ちひしがれたような人たちにアクセスする組織がなくなってしまいます。ファラカンなどは、憎しみを説いて憎しみを発散させ、その人たちをオルグして信徒にしていくのですけれども、そういう集団がなくなっていくわけです。

あるいは、ネイション・オブ・イスラムは軍隊式の制服を着て軍隊的な歩き方をするので、それが自由主義の風土に合わない、軍国主義的だとアメリカで批判

されてきました。ただそれも考えようで、アメリカにも非行少年を扱う社会福祉組織が多数ありますが、どうやって都市の非行少年を非行から救い出すかというと、ほとんどのところでやっているのが軍隊教育なのです。生活習慣を改善するのには、このような方法が適しているのかもしれません。

そういう意味ではネイション・オブ・イスラムという組織は、悪の世界、ギャンブルの世界に入った人間を受け入れて社会復帰させており、ある意味では非常にうまく機能したのです。逆に白人からみますと、そういう側面がミリタリスティックだしギャングと関係していて陰湿だということで批判されるのですが、ギャング・サミットで三万人から四万人集めることができるこういう組織がなくなって正統派に移っていくと、その種の人々に手を差し伸べる集団がいなくなることは確かです。

それからもうひとつ、アメリカの識字教育をやっているグループにいわせると、本当かどうかわからないのですが、アメリカの成人人口の三人に一人ぐらいは満足に字が読めないのではないかといわれています。半識字レベル以下の人々が六千万人ぐらいで、完全非識字に近い人が二千五百万人ぐらいといわれています。ですから大都市部でいうと、大体人口の四〇％から五〇％の人が字が読めない可能性があります。そういう層をネイション・オブ・イスラムは対象にするのです。識字教育をやるときにいちばん効果的なのはなにかというと、普通の教師が言葉を技術的に教えても駄目で、自分のもっている欲求不満や憎しみなどを発散させて吐き出させることによって、識字教育にコミットさせることが最も効果的なことのようです。ですからネイション・オブ・イスラムの識字教育は、ある意味では理にかなったやり方だと思われます。ネイション・オブ・イスラムは憎しみを説く集団と批判されるのですけれども、それ故に黒人のアンタッチャブルの世界に手を差し伸べてオルグして引き上げるという能力はもっているわけです。

次に、男女の別という問題です。ネイション・オブ・イスラムは外国のイスラムの世界と同様に男女の

別を強調し、百万人大行進などでも女性を入れない、とにかく男性の責任というのを強調します。ですからフェミニストのほうから権威主義でとんでもない集団だと批判されます。しかしそれも考えようで、アメリカの都市部の黒人男性の相当数が字を読めませんし、職にも就けず、要するに自尊心を打ち砕かれているわけです。その自尊心をどうやって回復するかというときに、ネイション・オブ・イスラムは軍隊教育をやったり、とにかく男である意識を徹底してたたき込むといわれています。フェミニストからすると、男の意識を強調するのはとんでもないということになるのですけれども、アメリカの黒人で家庭をもてるのは二〇％から二五％で、あとはほとんど母子家庭です。適齢期の黒人男性は失業率が高いために結婚できないし、また責任を引き受けないといわれています。ですからネイション・オブ・イスラムは男の責任を非常に強調するのです。あまり男、男というので白人のフェミニストの団体から突き上げられますが、しかしそれはそれで黒人の現状にあった対応のしかたかなと思います。

（まつおか　やすし／熊本県立大学教授）

（本稿は、二〇〇一年十月二十五日に行われた研究会での報告内容に加筆いただいたものです。）